

記憶が定かではないが、数年前、ある大手情報誌の文化的行事の種類や頻度、催事施設や料金などの統計学的調査をもとにして書かれた「芸術の秋が泣く―文化砂漠」と題する新聞記事を目にしたことがある。その時すぐに思い出したのが、一般には殆ど忘れ去られている西周の講述した『百學連環』のある一節である。

因みに、この講義は、沼津の徳川家兵学校の頭取を勤めていた西が、明治三年九月の東京政府の徵命によって兵部省と大学の学制局に出仕することになり、上京すると殆ど同時に浅草鳥越三筋町の自宅近くに家を借りて開いた福井藩士の為の私塾育英舎で（翌年秋神田西小川町に移転）、全集を編んだ大久保利謙氏によると、英語、数学、国語、漢文などの通常の講義のほか「特別講談」として講じられたものである。一族に連なる森鷗外の『西周傳』には「又毎月六次、別に Encyclopaedia の講筵を開く。所謂百學連環是なり」とある（ただし鷗外自身は、はじめはこの講義について何も知らなかったらしい）。また因みに、この講義は未刊のまま終わっており、我々の手もとには、全集に収録された西自身の極めて簡略な覚書と、慶応元年末より京の慶喜の側近にあった西に就いていわゆる△英学∇の講義を受け、さらに徳川家の駿府移封の後創設され西が頭取となった沼津兵学校にも学んだ福井藩士永見裕（のち西の女婿となる、門下に高山樗牛らがある）の筆録を残すのみである。前福井藩主松平慶永（春嶽）は、周知のごとく政事総裁職として公武合体を推進した当時の知識人の一人であるが、永見を介してこの特別講義の内容に接しており、明治六年の書簡で、「実に天下必要の件已にして政府の役人これを見て学び其方法を考察し施行するならば文明開化の域に日進の功を急がずして自然に人民日々開化日進すべしと思われたり」と述べている（全集四巻収録）。百學連環の講義は、たとえオランダ留学の成果であるその△西学∇の紹介とは言え、様々な学問領域を網羅的にかつ体系的に一定の方法意識をもって概説しようとした試

みであり、その学問的教養の卓越性と啓蒙思想家としての使命感を証明するに余りある、まさしく画期的なものである。春嶽ならずとも「驚くほどなる非常の大知識」と言わなくてはならない。漢学への造詣を基盤として西学的な語源のおよび思想史的説明を加えるという方途で、例えば、周敦頤（濂溪）の『太極図説』章十の「志學」の思想「聖希天賢希聖士希賢」をも顧慮して、またピュタゴラスやソクラテスにおける *the logos* の概念形成を辿りつつ、「希賢學」から「希哲學」そして「哲學」という訳語を發明するに至ったことや、「美妙學説」（『百學連環』では佳趣論）と題する本邦初の美学講義（明治四年稿、五年？御前演説）を行なったりしたのも、福沢諭吉の実学とは全く趣を異にするその広範な学問的活動の一端を示すに過ぎない。

さて話を戻すと、私がその文化の統計学に関する新聞記事から思い出したのは、春嶽の書簡にもある「文明開化」とスタチスチーキのことである。

西は、スタチスチーキ（第二篇・殊別学のうち第一・心理上学の五に位置づけられる計誌學）にも触れて、この学が、「因顯著之事件而知隱微之源由」（from facts to a cause）と「比較古今彼此而知其差推其源」（comparison）という二つの契機を有することを挙げ、「開化の度（civilization）」（ここには文明という語はないが、例えばのちに触れる論文には登場する）についても、このスタチスチーキが必須であると述べている。すなわち、「此開化の度を知るには其國の學校、拜ニ著書の數、及び寺院堂宮の盛衰に依り、其他劇場、娼妓、管絃、遊宴拜に祭日等にて一年間休業の日數に依つて知るを要す」ということである。「開化の度」を知る事項とは別にスタチスチーキの対象になる「箇条」は、国家の統治単位、人口、農工商の營為の実体、病氣（検査・予防）、氣象、土地台帳等である。スタチスチーキの必要なる所以は、「凡そ國政に預かるものは、第一其國のスタチスチーキを精細に知るにあらざれば、國政に預かること能はず。これを知らずして國政に預かるときは、恰も暗夜に物を探るに異ならず」というところにある。すなわち「政事學」の予備学ないし一部門とし

ての位置づけである。

それでは、西においては、すべてがこの「政事學」に包摂され、「文明開化」のことも言わば計量的な政事學的計画の中でしか考えられていないのかというと、決してそうではない。と言うのも、西は、『百學連環』の総論において、政事學もその包括性において最も代表的なものの一つである「學術技藝 (science and arts)」（ななし「學術」）と—この「art」は、技術 (mechanical a.、useful a.)、< industrial a. >と藝術 (< liberal art >、< polite a. >、< fine a. >) とに分かたれる—「文化」あるいは「人文」(『美妙學說』に頻出する用語)とを、截然と區別しているからである。

學術については、西はむしろ最広義に、およそ生活あるところ學術は必須であるとし、「天下の人皆學術の人ならざるはなし」としているが、体系的な問題として興味深いことは、「眞の學術に至りては、文化の資けなかるへからず」と言っていることである(この「文化」という語は、永見本乙本に拠る。西の覚書では、「文字」、永見本甲本では「文學」とあるが、乙本は、初稿本とされる甲本の修正を試みたものであり、また西自身が松平春嶽との関係もあって、永見本にある程度は目を通していると想定される)。

この「文化」の存在理由とは、「文化の功德たる第一今日より古へに通し、第二に四海に通ず、通達の道かならず文化の功德ならざるはなし、又上の第一二に反することあり、後來をして今をしらしめ、彼レをして我レを知らしむ」ことにある。その文化を担うものが「文學」に他ならず、「文學なくして眞の學術に至るなかるへし」、すなわち、「文と道とは元ト一つなるものにして、文學開くときは道亦明かなるなり」ということである。と言うのも、「西洋に Belle Lettres (ルビに、好文字)と云ふあり即ち英語之を humanities (ルビに、人道)或は elegant literature (ルビに、高上ノ文章)の(と稱せり此の)如く英國文字を人道と云ふ意は即ち mental civilization (ルビに、心ノ開化)なる意にして凡そ文字なるものは心を開くものなるか

故に、文字を人道とも云ふに至れり、心の開くは是レ道の明かなるなり」ということだからである。

この「道」V、ハ心V、ハ文V（文字、文學、文化、文明）の相即不離の思想は、例えば『文心雕龍』に「文之爲徳也大矣。與天地並生者何哉。……惟人參之。性靈所鍾。是謂三才。爲五行之秀。實天地之心。心生而言立。言立而文明。自然之道也。」（原道）とあるごとく、いわゆる広義の儒學思想の根底をなすものでもあり、その当否は別として、西は、まさしくこの「道」と心と文Vの相関に古今東西の「四通八達」の原理を見ているのである。

このように『百學連環』を見てくると、「開化の度」と「文化」の間には決定的な位相の差異がある。前者はスタチスチーキで比較考量することができるが、後者はそのような學術のありかたを体系的に規定する根拠である。前述の新聞記事は、ハードとソフトの両面にわたる調査をもとにしてということであったが、ソフトにも様な場面や体系的な重層性があることを全く無視しているし、その意味でスタチスチーキの射程についての方法的自覚を見事に欠いている。明治初期の、あれほどに「日進の功」（春嶽書簡）を必要とした事実大急ぎした時代にあつて、功利主義や実証主義の影響を受け、識字率を高めることによって「文藝學術」の向上を期すという当時の大問題に関して、「アベセ二十六字」の効用を説き、『明六雜誌』に「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」という一種愚民觀にもとづいた極論を書いた人が、一万では極めて冷静に「文ハ貫道ノ器ナリ」（韓退之）と言わば「ハ知の体系Vとしての文化を見据えていたことはまことに注目し値する。

今日のように、さまざまな場面において、いわゆる社会的ニーズあるいは国際的要請の美名の下に、究極には文化の根本に関わる論理がデュー・プロセスを省略して短絡化され、重層的な体系を持つ「ハ文化V」というソフトと言わば「ハ文化的環境Vとしてのハード」が場合によっては殆ど等置されて怪しまれず、またその折々のトピックについてはまさしくショート・レンジのスタチスチーキや効率の論理が横行するとき、「ハ文V」をもって

世界史を綾（文）なす人間存在の存在理由が剥奪されてゆく危機のただ中にあることを自覚せざるを得ない。

西の言う∧文∨の∧人間学∨的な存在理由に耳を傾け、その意味での∧人文学∨の∧文化∨全般における体系的意味と位置を根本的に認識し直し、現代という歴史的なトポスにおいて必要となってくる∧知の再編∨に資してゆくべきではなからうか。スタチスチーキもそのときはじめて∧知の体系∨の中で相応しいトポスを得ることができ、また∧人文∨に資することができるのである。

あらゆる文化的ないし自然的状況の流動性が一層高まってゆくなかで、本研究紀要もスタッフや大学院生諸君の協力を得て、幸いにして、第十輯を送り出す運びとなった。この営みを絶やさないためにも、諸先生、諸兄、諸姉の忌憚のない御叱正を賜ればまたさらに幸いなことである。

一九九二年三月二日

藤田 一美